

「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」でのESDの概念に関する国際ワークショップ  
—これまでの道のり、今後の展望—

The International Workshop on the Concept of ESD during the UNESCO World Conference on ESD 2014: Where We Came from and Where We Are Heading

松原 憲治\*<sup>1</sup>、ロブ・オダナヒュー\*<sup>2</sup>、佐藤 真久\*<sup>3</sup>、岡本 弥彦\*<sup>4</sup>、  
五島 政一\*<sup>1</sup>、二井 正浩\*<sup>1</sup>、後藤 顕一\*<sup>1</sup>、上野 耕史\*<sup>5</sup>  
MATSUBARA Kenji, O'DONOGHUE Rob, SATO Masahisa, OKAMOTO Yasuhiko,

## Abstract

From 10-12 November 2014, UNESCO held the World Conference on ESD in Aichi-Nagoya for reviewing UN Decade of Education for Sustainable Development (DESD) and setting the agenda for Education for Sustainable Development (ESD) beyond 2014. NIER co-organized one of the international workshops during the international conference, working closely with Rhodes University in South Africa. Theme of the international workshop was the concept of ESD, “Where We Came from and Where We Are Heading.”

This paper discusses the process of the preparation of the workshop content, its implementation and operation, and the recommendations drawn from the workshop activities involving more than one hundred participants with various backgrounds. One of the focuses of workshop activities was on supporting the implementation of the Global Action Programme (GAP) on ESD and the recommendations drawn were grouped into the five GAP priority action areas of advancing policy, improving learning and training environments, enhancing capacity of educators and trainers, empowering and mobilizing youths, and striving for sustainable solutions at the local level. The paper also points out that preparing a meeting with emphasis on diversity, participation, and collaboration could be an important aspect when holding an ESD related meeting.

## 1. はじめに

「国連 ESD の 10 年」の最終年である 2014 年に、日本政府とユネスコ等の共催で ESD に関するユネスコ世界会議が我が国において開催された。本会議では、我が国をはじめ世界各国における「国連 ESD の 10 年」の活動を振り返るとともに、2015 年以降の ESD 推進方策について議論がなされた。本会議の成果の一つは、ESD の更なる発展を目的とする「国連 ESD の 10 年」の後継プログラム「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム (GAP)」の具体的な実施に向け、各ステ

\*1 教育課程研究センター基礎研究部総括研究官

\*2 南アフリカ・ローズ大学教授

\*3 東京都市大学准教授

\*4 岡山理科大学教授

\*5 教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

ークフォルダーが ESD を更に強化し、そのための行動を起こすことを宣言する文書（「あいち・なごや宣言」）が全会一致で採択されたことであった。GAP に関する議論は、ESD に関するユネスコ世界会議での全体会合、国際ワークショップやサイドイベント等の様々な場において進められた。公式プログラムである国際ワークショップは四つのクラスター、「10 年間の成果から（クラスター I）」、「万人にとってより良い未来を築くための教育の新たな方向付け（クラスター II）」、「持続可能な開発に向けた行動促進（クラスター III）」、「2014 年より後の ESD アジェンダの設定（クラスター IV）」のテーマで構成されたが（表 1）、国立教育政策研究所はクラスター I のワークショップ 1

表 1 : ユネスコ世界会議（2014 年 11 月 10-12 日）における主要な国際ワークショップ（一覧）

<b>Cluster I: Celebrating a Decade of Action</b>	
Cluster Advisors: Gerhard de Haan & Dorcas Otieno	
1	ESD concept
2	ESD policy
3	Contribution of ESD in meeting the internationally-agreed development goals
4	Development of local initiatives and multi-stakeholder networks for ESD
5	Innovative teaching and learning approaches to ESD
6	Mobilizing partnerships for ESD
7	Monitoring and evaluation of the DESD and ESD
<b>Cluster II: Reorienting Education to Build a Better Future for All</b>	
Cluster Advisors: Chuck Hopkins & Rachel Trajber	
1	Early childhood care and education
2	Primary and secondary education
3	Higher education and research
4	Technical and Vocational Education and Training (TVET) / Green skills
5	Teacher education
6	Non-formal and community learning
7	Information and Communication Technology (ICT)
8	Innovative learning spaces and opportunities for ESD
9	Educating for sustainable development and global citizenship
<b>Cluster III: Accelerating Action for Sustainable Development</b>	
Cluster Advisors: Kartikeya Sarabhai & Pascal Houenou	
1	Water and sanitation
2	Oceans
3	Energy
4	Health
5	Agriculture and food security
6	Biodiversity
7	Climate change
8	Disaster risk reduction (DRR)
9	Sustainable consumption and production (SCP)
10	Green economy in the context of poverty eradication
11	Sustainable cities and human settlements
<b>Cluster IV: Setting the Agenda for ESD beyond 2014</b>	
Cluster Advisors: Michel Ricard & Sally Asker	
1	Promoting holistic 21st-century competencies
2	Integrating ESD in policy at different levels
3	Sustainable Development Goals (SDGs)
4	Role of local initiatives in advancing ESD
5	Whole-institution approaches to ESD
6	Catalyzing support for ESD
7	Monitoring and reporting frameworks of ESD beyond 2014

「ESD の概念－これまでの道のり、今後の展望－(The Concept of ESD: Where we came from and where we are heading)」を南アフリカのローズ大学 (Rhodes University) と共同主催した。本稿はこの ESD の概念に関する国際ワークショップの実施について報告することを目的とする。特に、国際ワークショップの内容の形成過程、内容と実施、そしてワークショップの議論によって得られた各ステークホルダーからの GAP に関する提言をまとめる。これによって、国際ワークショップにおける GAP に関する議論において、多様性、参加や対話を重視した取組を通して多様なステークホルダーの参加を促進し、対話がなされたことを示すことができよう。

本稿は次のように構成される。まず、ESD の概念に関する国際ワークショップの内容の形成過程について、各参加機関のコーディネータによる調整、及び、国際ワークショップの事前に行われた準備会合での議論を中心に示す。次に、当日の国際ワークショップで主要な発表を紹介する。そして、国際ワークショップでの参加者の議論から得られた知見として、5つの GAP に関する提言を整理する。なお、本稿の一部はワークショップコーディネータからユネスコに提出した最終報告書(英文)を基にしている。

## 2. 国際ワークショップの内容の形成過程

国際ワークショップは「持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するユネスコ世界会議」の公式プログラムとして、ESD の理念の一つである参加と対話に基づき、異なる国の二つの機関による共同開催が求められた。両機関には一人ずつコーディネータが配置され、コーディネータ間の議論と調整を通して、国際ワークショップの内容を形成することが期待されていたといえる。ESD の概念に関する国際ワークショップについては、日本の国立教育政策研究所と南アフリカ共和国のローズ大学という二つの国の機関の共同主催であり、国立教育政策研究所側のコーディネータ (教育課程研究センター・基礎研究部の総括研究官) とローズ大学側のコーディネータ (ヘイラ・ロツシトウカ教授) とが、本国際ワークショップの内容について議論し、綿密に調整を行った。これにより、ESD の概念に関する課題を踏まえながら、国際ワークショップにおける目的と内容の焦点化が図られた。そして国際ワークショップの内容の効果的な提示方法や国際ワークショップ参加者からの意見の集約方法、および得られた意見のフィードバックの方法が考案された。

他方、このような国際ワークショップでは、全体としての内容に関する議論と調整が必要である。これについては、2014年6月26日から27日にかけてユネスコのパリ本部において開催された準備会合がその機能を果たしたといえる。本準備会合には、計34の国際ワークショップの担当組織から参加があり、全体調整がなされた。国立教育政策研究所が担当する ESD の概念に関する国際ワークショップにおいては、国立教育政策研究所の佐藤真久客員研究員 (東京都市大学准教授) が出席をし、共同主催組織であるローズ大学からは、ヘイラ・ロツシトウカ教授が出席をした。本準備会合の全体会合では、「国連 ESD の 10 年」のレビューが共有されたのち、2015 年以降の GAP の目的、戦略、実施方法、コミットメント・アプローチが共有化され、議論が深められた。その後、最終年会合にむけた方針の共有と決定、関係主体の作業計画の共有がなされた。本準備会合のクラスター I の分科会では、ESD 概念構築に関する主要な国際的取組が共有された。ESD 概念構築に関する主要な取組においては、共同主催組織であるローズ大学が深く関わった UNESCO の ESD レビュー・ツール (UNESCO、2010) や、国立教育政策研究所 (2012) の ESD の学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み (以下、「ESD の枠組み」と略す) などが紹介された。分科会では ESD の概

念に関する国際ワークショップ（クラスター I –ワークショップ 1）における ESD 概念を議論する基礎資料として、ESD 概念の構築のプロセスと活用方法に特徴のある国立教育政策研究所の ESD の枠組みが選択された。国際ワークショップでは多様な背景（国、文化、専門性など）を持つ 100 名を超える専門家、行政、NPO/NGOs の参加が期待されていたが、このような多様な背景を持つ参加者を対象とした国際ワークショップにおいて、国立教育政策研究所の ESD の枠組みが ESD の概念に関する議論の基盤として選択されたことは意義深いと考えられる。

### 3. 「ESD の概念に関する国際ワークショップ」の内容と実施

開発されたプログラムと国際ワークショップの概要を 3.1 に示す。次に、ESD の概念に関する国際ワークショップでの主要な発表について、各発表の要点を 3.2 から 3.4 に記す。

#### 3.1 開発されたプログラムとワークショップの概要

前述の国際ワークショップの内容の形成に関する議論を受けて開発されたプログラムを表 2 に示す。なお、国際ワークショップ後半では GAP への寄与と ESD の促進に関する議論を組み込むことで、「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」の全体会議に向けた意見の集約を目指したものである。

表 2：国際ワークショップ（I-1）のプログラム  
【テーマ】 ESD の概念：これまでの道のり、今後の展望

1. 導入
2. ESD の概念と歴史に関する発表（ローズ大学）
3. 学校における ESD の概念の枠組みの提示（国立教育政策研究所）
4. [活動 1]：ESD がどのように学習と社会変化に関わるかについての議論（国立教育政策研究所の ESD の枠組みを基に）
5. GAP への寄与と ESD の促進に関する事例発表（ローズ大学）
6. [活動 2]：様々な分野における GAP への寄与と ESD 促進に関する提言の作成
7. 主要な提言のまとめ

ESD の概念に関する国際ワークショップは以下のように実施された。まず、ESD の概念に関する課題を提起するために、ローズ大学のロブ・オダナヒュー教授から ESD の概念と歴史に関する発表がなされた。次に、ESD 概念を議論する基礎資料として、リソース・パーソンの岡本弥彦客員研究員（岡山理科大学教授）から国立教育政策研究所のプロジェクト研究で開発した ESD の枠組みが参加者に提示された。この枠組みを基にプログラムの [活動 1] として、ESD がどのように学習と社会変化に関わるかについての議論が行われた。国際ワークショップ後半は GAP への寄与と ESD の促進に関する議論を促進するために、ローズ大学から発表がなされ、続いてプログラムの [活動 2] として、様々な分野における GAP への寄与と ESD の促進に関する提言が作成された。

国際ワークショップの実施運営にあたっては、ファシリテータの佐藤真久客員研究員がローズ大学のロブ・オダナヒュー教授と共に全体進行を担当した。当日の準備と実施運営については、コーディネータ、ファシリテータとリソース・パーソンに加えて、国立教育政策研究所教育課程研究センターの研究官 3 名と教育課程調査官 1 名が携わった。

次に、主要な発表として、ローズ大学による ESD の概念と歴史に関する発表、国立教育政策研究所による学校における ESD の概念の枠組みの提示、ローズ大学による GAP への寄与と ESD の促進に関する事例発表の順に発表内容の概要を示す。

### 3.2 ESD の概念と歴史に関する発表：ロブ・オダナヒュー教授

ESD の基本概念は奥が深く、多様かつ複合的である。また、初期の技術的介入や行動変容という観点から、地域のみならず地球全体の持続可能性に関する懸念を扱う幅広い分野について協調学習に取り組むことへの転換が反映されている。現在、ESD はメッセージを伝えるというよりも、リスクを回避し、将来にわたる持続可能性を実現する能力を開発するために人々が力を合わせることに重点を置いている。「国連 ESD の 10 年」における ESD の急を要する領域（図 1）には、新しい環境システムの知識や、評価が定まっている活動を見直し、リスク回避のための行動を探究する学習活動における倫理主導型プロセスが含まれている。

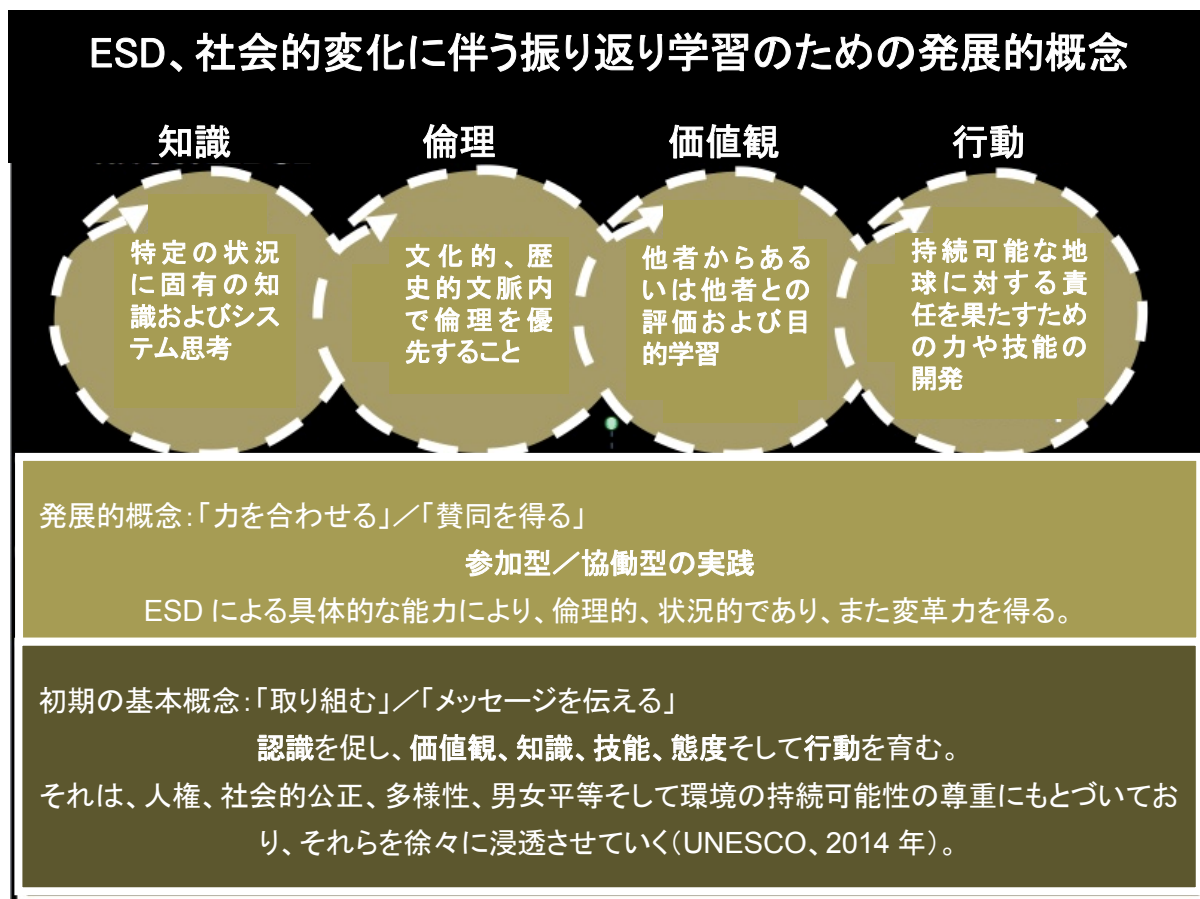


図 1：ESD の発展的概念の急を要する領域

### 3.3 学校における ESD の概念の枠組みの提示：岡本弥彦客員研究員

ここでは、国立教育政策研究所のプロジェクト研究「学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究」において開発した ESD の枠組みを提示した(図 2)。国立教育政策研究所では、2009 年から 4 年間にわたり、学校における ESD の推進・充実を目的として研究を行った。研究に当たっては、所内の委員だけでなく、外部の協力者も含め、90 人以上のメンバーからなる組織を立ち上げた。国内外の文献や取組の調査、学校におけるモデル的な学習プロジェクトの実施な

どとともに、文部科学省の教科調査官や学校の教員を交えた議論などを通して研究を進め、2012年に最終報告書を発行することができ、その中で、ESDの枠組みを提言した。

図3は、そのESDの枠組みを簡潔に表したものである。この枠組みでは、学校におけるESDの目標を「持続可能な社会づくりに向けての課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力・態度を身に付けること」と定め、学習活動を進める中で、この目標の達成を目指すことが、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うことにつながると考えた。そして、「持続可能な社会づくり」を捉えるための6つの構成概念と、ESDにおいて重視する7つの能力・態度を提言した。



図2：ESDの枠組みの提示（発表者：岡本弥彦客員研究員）

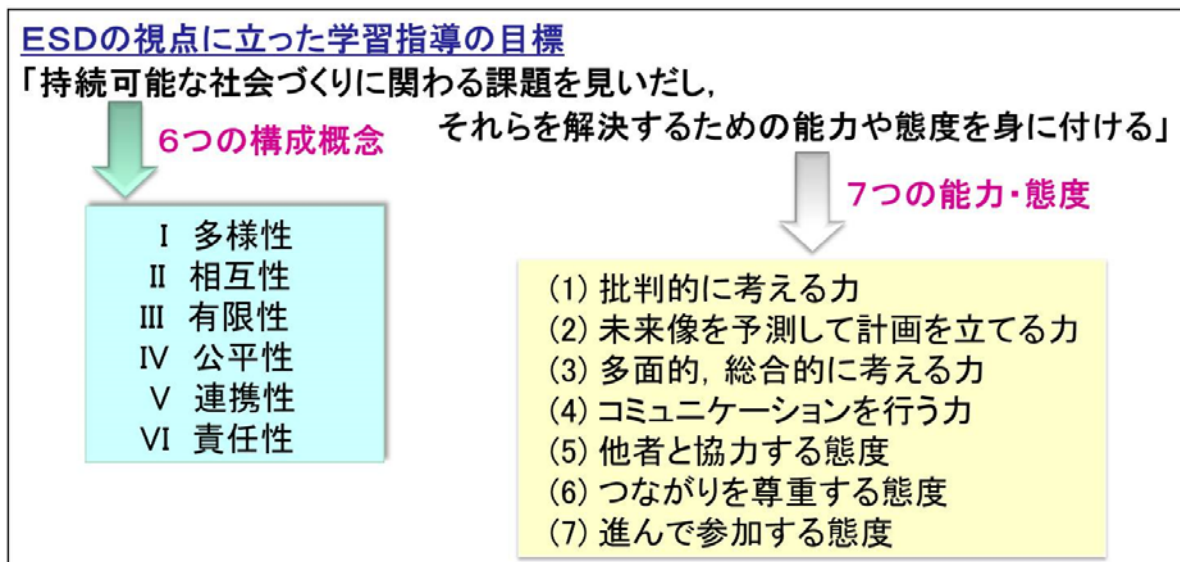


図3：国立教育政策研究所が開発したESDの枠組み

6つの構成概念（多様性・相互性・有限性・公平性・連携性・責任性）は、羅列的なものではなく、構造化されたものである。持続可能な社会づくりは、極めて大きな概念であるため、2つの側面と3つの視点を設定した。まず、持続可能な社会づくりは、人を取り巻く環境、つまり、自然・文化・社会・経済などに関する側面と、人の集団・地域・社会・国などの意思や行動に関する側面に大別できるということである。言い換えると、我々が生きている世界をどのように捉えるかとい

う側面と、それを持続可能なものへと変革するには、どのようにすべきか、という側面である。次に、持続可能な社会をシステムとして捉える必要があると考えた。システムとは、基本的には、多様な要素からなること(Element)、それらが互いに作用し合っていること(Relation)、そして、ある方向へ変化していること(Change)である。これらをマトリックス(2側面×3視点)として整理したのが、6つの構成概念である。これらの構成概念は、持続可能な社会づくりに関する学習課題や教材を捉えるための視点にもなるものである。

次に、7つの能力・態度とは、批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的・総合的に考える力、コミュニケーションを行う力、他者と協力する態度、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度である。日本では、子供たちが21世紀を生き抜くために必要な力として「生きる力」を掲げており、知識や技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力の育成や、自律心・協調性の育成などを重視している。7つの能力・態度も、これらと整合させている。さらに、国際的な学力の標準とされているOECDのキー・コンピテンシーとも、強く関連づけている。つまり、批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的・総合的に考える力は、習得した知識を活用するためのコンピテンシーであり、コミュニケーションを行う力、他者と協力する態度は、集団の中で交流するためのコンピテンシーであり、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度は、自律的に活動するためのコンピテンシーである。これら7つの能力・態度が、持続可能な社会づくりに関する課題を解決するために必要なコンピテンシーであると本研究では考えた。

ここで提示したESDの枠組みは、日本の多くの学校において、カリキュラム開発や教育実践に活用されている。特に、教科を横断した取組や、総合的な学習の時間での取組が多く見られる。また、この枠組みは、学校教育だけでなく、地域の文化や自然などを学ぶ社会教育活動にも活用されるようになってきており、ESDを通して学校教育と社会教育をつなぐ上においても、この枠組みが役立っている。

### 3.4 GAPへの寄与とESDの促進に関する事例発表

続いてローズ大学の関係者から以下の3つの事例が示された。

ローズ大学のユース代表であるインジャイル・クルンドウ女史は、変革促進活動(Activate Change Drivers)(SA)から若者の視点を提示した。彼女は歌から始め、ESDとは単に共感することではなく、関連付けの大幅なやり直しと社会環境的再構築、連帯、そして未来を共に創造するプロセスとして取り組まなければならないと指摘した。従って、それは動詞であり、またすべてを含んだシステムアプローチのはずであると述べている。

ロブ・オダナヒュー博士は、次にフンディサ・フォー・チェンジ(Fundisa-for-Change)による教師の専門的能力開発プログラムの概要を説明した。彼は、大学、NGOそして国家機関が、南アフリカのカリキュラムおよび評価方針(National Curriculum and Assessment Policy Statement)のなかで、新しい環境システム知識に重点を置く教師の専門能力開発プログラムにどう協力しているか伝えた。ここでは、指導と学習を強化し、エコスクールを支援するため、地域におけるホールスクールアプローチが活動に用いられていた。加えてロブ・オダナヒュー博士は、ESDが若者をどう憂うつにしたり怖がらせたりするかよりむしろ、ESDをGAPにおいてどう機能させるかだと指摘した。

プリマス大学ステファン・スターリング教授は、デイヴィッド・オーア教授による地域復元力に関する研究の概要を手短に述べた。これは、解決が難しい場合が多い持続可能性の複雑さに対してESDの概念がどう切り込んでいけるかという興味深い疑問を投げかけたものである。我々の複雑な



社会、環境や地球のシステムにおいてESDが変革を促せるということを明らかにしなければならないが、この地域復元力に関する研究はこの様な課題に取り組み始めている。

#### 4. 本ワークショップで議論されたGAPに関連する主要な提言

本報告の最後に、プログラムの〔活動2〕のグループディスカッション（表2）で得られた5つのGAPに関連する主要な提言をまとめる。

〔活動2〕におけるグループディスカッションでは、GAPの5つの優先行動分野に対応して15のグループ（1つのGAPにつき3グループ）が設置され、参加者はそれぞれの関心に沿ったグループに入り議論に参加する形態をとった。各グループにおける協議後の意見等は、ワークショップ実施中にシートにまとめられた後、会場の側面に掲示されることで参加者全体に共有された。シートの各グループの協議結果の記述は記録され、ワークショップ後にテキスト化され、〔活動2〕における議論は5つのGAPに関連する主要な提言としてまとめられた。これらをGAPの優先行動分野である政策的支援（ESDに対する政策的支援）、機関包括型アプローチ（ESDへの包括的取組）、教育者（ESDを実践する教育者の育成）、ユース（ESDへの若者の参加の支援）、地域コミュニティ（ESDへの地域コミュニティの参加の促進）の5つについてそれぞれ以下に示す。

##### 政策的支援（ESDに対する政策的支援）

- ・ESDを教育及び持続可能な開発政策の主流に組み入れ、ESDを行いやすい環境を創り、体系的変化をもたらす。
- ・可能であれば、誰にでも受け入れられて協力が得られるよう、その価値が明らかになる方法でESDを実践し、すべての意見を聞くようにする。
- ・現行の教育政策モデルおよび実践は、持続不可能な考え方や実践を残していることが多いので、現行モデルに対する批判的思考を促すことは、あらゆるシステム変革の可能性において前提となる必要条件であることを認識する。
- ・人々が自分の未来創造に関わっていると感じられるよう、既存の枠にとらわれない思考と前向きな取り組みを推し進める。
- ・十分に足並みが揃うようトップダウン式の方針が必要であり、それがボトムアップの革新につながる。
- ・GAPに足りないのは資金の問題である。そこで、持続可能性の新しい取り組みの追求には、公的機関あるいは民間組織との強力な協力関係を促進する必要がある。

##### 機関包括型アプローチ（ESDへの包括的取組）

- ・教育や訓練の環境に持続可能性の原則を融合させる（教育機関全体アプローチ）。
- ・「すべてのプログラムを網羅するたった一つの基準」などないことを認識する。つまり様々な状況や必要性を認める必要があるということだ。
- ・伝達内容に一貫性が生まれるよう教育機関の指導モデル作りを支援する。また、実践的学習は教育に欠かせない要素である。

##### 教育者（ESDを実践する教育者の育成）

- ・ESDの効果的提供のために、教育者や指導者の能力を高める。
- ・多くの国でESDは初めてのことであり、教師に能力を身につけさせる訓練を開発し、ESDの能力開発を行うことが非常に重要である。
- ・学校に対するよりよい知識の移転が行われるよう、NGOと学校制度との間の協調を強化する必要がある。



- ・ ESD の推進に関して各国は異なる段階にあるので、専門的な知識や経験を効果的にやり取りできるような世界的プラットフォームが必要であり、それにより体系的変化を加速させることができる。

#### ユース (ESD への若者の参加の支援)

- ・ 若者たちのアクションを生み出す。
- ・ 最低限の安心が最優先事項である場合、ESD を組み込むことはできない。最低限の安心とは、安全、水、食料、そしてインフラであり、それらは第一の権利として与えられなければならない。
- ・ 若者が自分自身やその家族を養い、回復力に富む社会の構築に力を貸せるよう、ESD には創造性と企業家能力の開発を含めなければならない。
- ・ 芸術音楽、映像、美術、そしてソーシャルメディアを用いて若者に ESD あるいは SD を伝達し、文書に頼らない。

#### 地域コミュニティ (ESD への地域コミュニティの参加の促進)

- ・ 地域コミュニティや市当局に働きかけ、地域社会密着型の ESD プログラムを開発する。
- ・ サハラ以南のアフリカのような 壊れやすい環境では、適切な ESD 手法を用いて親や地元の生産者を学校に関わらせ、地域の復元力と自立力を強化する。

以上、プログラムの [活動 2] のグループディスカッションで議論された GAP に関連する主要な提言を、5つの優先行動分野について整理して示した。これらの提言のうち一部については速記者によって別に記録された後、大会事務局に提出され、全体会合の資料の一部として活用されている。整理された提言から一部を取り上げると、「持続可能性の新しい取り組みの追求には、公的機関あるいは民間組織との強力な協力関係を促進する必要がある。」、「NGO と学校制度との間の協調を強化する必要がある。」、「地域コミュニティや市当局に働きかけ、地域社会密着型の ESD プログラムを開発する。」など、学校における ESD を超えて、地域コミュニティとの連携の重要性を述べているものがある。これは、今後、ESD がどのように学習と社会変化に関わるか等の具体的な議論を進めるためには、地域コミュニティなど多様な関係者との連携・協働的な取組が期待されることを意味している。

## 5. おわりに

本国際ワークショップでは ESD の理念の一つである参加と対話に基づき、多様な背景を持つ参加者から GAP に関連する様々な提言がなされた。参加登録者数は 259 名にのぼり、当初の想定を大きく上回る参加者数となった。ESD の概念について関心の高さをうかがい知ることができる。

ESD に関するユネスコ世界大会の最終日の全体会合では、前述のように GAP の具体的な実施に向け、ESD を更に強化し、行動を起こす宣言である「あいち・なごや宣言」が全会一致された。本稿で示した報告は、あいち・なごや宣言は決してトップダウンの宣言ではなく、多様な背景を持つステークホルダーの参加と対話によって合意形成がなされたことを、部分的であれ示すものである。多様性、参加や対話を重視した会合の場が意図的に用意されたことは、会合の実施・運営自体が ESD の理念に沿ったものであったことを表すといえる。今後 ESD 関連の会議を行う際、一つの参考となりうるだろう。

## 参考文献等

UNESCO, 2010, *Education for Sustainable Development Lens: A Policy and Practice Review Tool*, Education for Sustainable Development in Action Learning & Training Tools no.2 – 2010

国立教育政策研究所（2013）『国立教育政策研究所紀要第 142 集 特集：ESD の国際的な潮流』

国立教育政策研究所（2012）『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕』

国立教育政策研究所（2011）『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔中間報告書〕』

国立教育政策研究所（2009）『学校における持続可能な開発のための教育に関する研究（準備会議報告書）』

（受理日：平成 27 年 3 月 31 日）